

亡き人と歩む姿を見つめて

NHKスペシャル『亡き人との“再会”』(2013年制作、2014年再放送)のディレクター、佐野広記さんのインタビューをご紹介します。「わかりにくくても、ありのままを受け止める」という姿勢に、被災者の心に寄り添う強い意志を感じました。

(プレジデントオンライン 9月29日号より抜粋)

we support!
RQ
災害教育
センター

MONTHLY

「東北に黒龍を送ろう!」大作戦しんぶん改め
復興支援『すけさきた』
かめばばばと
しんぶん

「すけさきた」とは
宮城県登米市あたりの言葉で
「ボランティアに来たよ」という
意味である

OCTOBER
11
2014



亡き人との“再会” ～被災地 三度目の夏に～

「報道者として何をすべきか」
震災の日から現在に至るまで、東北各地に通い、地元の方たちと交流を続けるなかで、気がかりだったのは、時間が経つことに「ようやく被災者は前を向き始めた」といった、わかりやすいレッテルを貼った報道が増えてきたこと。自分が知る被災者の方々は、そんな単純な感情の中にはいないし、状況は一人一人でかなり違う。むしろ世間のわかりやすい決めつけに、辛い思いをされている人も多い。どういふ報道をすべきなのか、自分なりの答えを探してきました。

「おばあちゃんとの再会の一報」

震災から半年が経過した9月、ある女性から電話がありました。その方は、義理の母と一緒に津波にのまれ、「自身だけ助かった体験をされています。「もつとちゃんと手を握っていたら」「なんで私だけが助かったんだろ?」。自分を責め続け、精神的に辛い毎日を送っていました。」

その女性が、電話口ではとても嬉しそうな声で「明け方に、おばあちゃんが枕元に出てきてくれたのよ!紫色の立派な着物を着てすぐく「ニ」ニしていて。「もう好きなように生きていいのよ。あなたの人生を歩みなさい」と伝えてくれたの」と言うのです。「最初の辛い顔が思い浮かばなかったけど、笑顔も思い出せるようになった」と。

NHKスペシャル『亡き人との“再会”』より



「亡くした子供の名を何気なく呼んだら、お母ちゃんの手がひとりでも動いた。一瞬驚いたが、すぐに「ああ、〇〇ちゃんがいる」とわかった」



「津波で死んだ二人の息子が、見知らぬ女の子に連れられて現れ、話しかけてくれた」

「わかりにくくても、ありのままに」

大切な人との再会体験は、目にも見えなければ、カメラで記録することもできません。しかし大切なことは、体験が科学的に説明できるのではなく、「体験をした人が大勢いる」という重い事実を伝えること。死者を身近に感じた人たちのかけがえのない体験が膨大に存在するのです。それは極めて個人的な物語であり最大限尊重されるべきだと思ふに至ったからです。

「再会」を果たした人は、自分たちの体験を「幽霊」や「幻覚」というわかりやすい言葉で表現されたいとおつしやいました。「幽霊」と言つと、恐ろしいものというニュアンスを含んでしまうし、「幻覚」と言う存在そのものを否定してしまう。彼らからしたら、出会ったのは家族そのものなのです。番組の構成は、

やがて他の方々からも「亡き父が目の前に現れた」「声が聞こえた」「亡き子どものおもちゃがひとりでも動いた」という話を伺うようになり、「亡くなった人」と「再会」した」という目に見えない事実をきちんと報道すべきではないかと考え、番組を提案しました。

体験者ご本人の口から、ありのままに気持ちを語ってもらう形にしました。何か結論が出るわけではありませんが、むしろそれではないか。最終的に、被災者4人による、証言ドキュメントのような番組になりました。

「自分だけではなかった」

放送後、被災地からは「私たちの気持ちをそのまま出してあげてありがとう」という声を数多くいただきました。実はこうした体験をしていても、他人の目を気にして口に出せない人も少なくありません。体験者の肉声が放たれることで「自分だけではなかった」「人に話さずくだった」という安心感が得られたようなのです。

被災地以外の方々からも、「このテーマに最初は驚いたが、自分の大切な亡き人を思いながら共感した」「私も体験がある」などという反響が寄せられました。大切な人の死や、その人を思い続ける気持ちは普遍的なものです。人間の持つ複雑で繊細な心の奥底に、番組が訴えかけることができたのかもしれない。

「再会」で物語は終わらないけれど」



佐野広記さん

資料: プレジデントオンライン 9月29日号「被災地で届く『亡くなったはずの家族との“再会”』」(抜粋は文庫版による)、NHK、Youtube